

大学教育再生加速プログラム(AP) 中間評価結果

整理番号	30	大学等名	金沢工業大学
テーマ	テーマ I・II 複合型		

【総括評価】

A：計画どおりの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる。

【コメント】

<優れている点>

- ・これまでの GP 等における取組を発展させつつ、アクティブ・ラーニングの全学的展開と学修成果の可視化が進んでおり、様々な改革の成果が得られている。特に、課外教育プログラムへの参加者が増加し、正課教育と課外教育との接続が意識され、能動的な学びが促されていることは評価できる。
- ・当初計画よりも前倒しをして全科目に導入されている e-シラバスは、カリキュラムフローとリンクして科目のつながりを意識できるような設計になっており、また、全科目に導入している「総合力」指標も確認できる。成績評価においては、多面的な評価方法で学修の過程も評価できるような仕組みとなっており、学生の学修に細かく配慮した教育システムは評価できる。また、その成果は学生の授業外学修時間の大幅な増大にも結びついていると考えられる。
- ・自己評価については、学内の各種情報を IR 部門で集計・分析し、その結果を踏まえて、全学、学科・課程、授業科目の複数のレベルで今後の計画、改善策を検討し、FD・SD 活動にまで発展させている。評価から改善に結びつける体制が整備され、恒常的に機能していると言え、評価できる。
- ・平成 28 年度からは高大接続改革推進事業を意識し、高校、大学、産業界が連携して PBL 型教育における評価のためのルーブリックの作成に取り組んでおり、評価できる。
- ・他大学からの視察の受入れも多く、学外での講演や執筆・発表の機会にも恵まれている。また、大学ばかりでなく、高校との連携やステークホルダーとの交流会も行われている。さらに、平成 30 年には CDIO 国際会議を主催する予定であり、広く国内外に向けて事業成果を普及する計画を立てていることは大いに評価できる。

<改善を要する点>

- ・学修行動調査の 2 年次以降の実施率が目標値をかなり下回り、データとしての信頼性が懸念される。個々の学生の状況把握については自己成長シート等が充実していることによりあまり支障はないと考えるが、大学として学修行動調査をどのような目的でどのように活用するか、他の調査とどのようにすみ分けを図るかなど、再検討した上で今後の方針を固める必要がある。